

特集
中国

窓 18

1993 WINTER

鄧小平の最後の挑戦 =
加々美光行 ■ “社会主
義市場経済”のゆくえ
= 上原一慶 ■ 地球の環
の試金石として環中
= 秋山紀子 ■ 国家の自
己融解の可能性 = 菱田
雅晴 ■ 21世紀中国の三
つのシナリオ = 渡星光
■ 商人に裏身する中
知識人 = 周海林

家事労働はなぜタダか
= 大沢真理 ■ 近代の道
化? ドイツの知識人
= シュテフイ・リヒタ
一 ■ ロシア短僧 = 藤井
一行 ■ 裏表する生死観
= 川上武

窓に語る
マドモアゼル・ジャコフの人生
わが人生、わが研究 聞き手・松々木洋

窓社
MADO SHYA
定価1700円(本体1650円)

ISBN4-943983-75-8 C3030 P1700E

家事労働はなぜタダか

大沢真理からジュリエット・シヨアへ

特集Ⅱ中国はどっこ

統合原理

鄧小平の最後の挑戦

●脱イデオロギー的国民国家への道
●適度な改革と適度な開放

加々美光行

16

国有企業

“社会主義市場経済”のゆくえ

●国有企業改革の実態を中心に
●改革の発展を期するなかで、資本主義の方向に進まざるを得ない

上原一慶

31

環境問題

地球環境の試金石としての中国

●「持続可能な発展」は可能か
●環境改善の名目で、中国に押しこめられるべきか

秋山紀子

57

農民反乱

国家の自己融解の可能性

●農村でなにが起こっているか
●農民の反乱は結果としての王朝交代という歴史的事象を想起させる

菱田雅晴

84

国際関係

21世紀中国の三つのシナリオ

●グローバル化のなかの進路
●アメリカや日本など西側諸国との関係に問題はないか

凌星光

104

スシナル
イタゴキ

留学生
商人に変身する中国知識人

●「下海」現象の意味するもの

周海林

74

特別寄稿

近代の道化？ ドイツの知識人

●他者をしてみずから語らしめよ

S.リヒター
照井日出喜訳

180

報告

ロシア短信

●大統領令と議会派反乱制圧へのロシア人の反応

藤井一行

144

シリーズ

変貌する生死観

●高齢化社会に現れた最大の課題

川上武

164

■現代日本人の生死観 ③

「社会主義市場経済」のゆくえ

● 国有企業改革の実態を中心に
生産の調整を担うかがり、
資本主義の方向に進まざるをえない
上原 一麿 31

地球環境の試金石としての中国

● 持続可能な発展は可能か
環境の名目、中国人に押し
アトハをばうと言えるか
秋山 紀子 57

国家の自己融解の可能性

● 農村でなにが起こっているか
農民の反乱は糧食としての王朝交代
という歴史を繰り返す超きせる
菱田 雅晴 84

21世紀中国の三つのシナリオ

● クロイバル化のなかの進路
アメリカや日本など西側諸國の
中国への対応に問はぬか
凌 星光 104

わが人生、わが研究

● ショピス・グレイズエラ大いに語る
最近のロシアを助けて
なぜ農業問題に取りくんだか
農業再生産の道
個人的経歴と政治的経歴
ロシア人へのエッセイの非公式回答
ソビエト時代にもわが研究が
日本の興味
伊藤 孝 佐々木 洋 118

商人に変身する中国知識人

● 「下海」現象の意味するもの
周 海林 74

近代の道化？ ドイツの知識人

● 他者をしてみずから語らしめよ
S.リヒター
照井 日出喜訳 180

ロシア短信

● 大統領令と親会派反乱制圧へのロシア人の反応
藤井 一行 144

交響する生死観

● 現代日本人の生死観 ③
● 高橋正幸に對する私の生死の課題
川上 武 164

フエミニスト社会科学の到来

● 大沢真理著「企業中心社会を脱して——現代日本をシエタムて読む」
稲葉 振一郎 152

編集部

155

「キメラ」山家信二著
「三代が誕生だわつみ」堀切和雅著
「皇室・家族論」芥沢俊介著
「ホロコーストの科学」ベン・ミンデル著
「フエミニストと發現の自由」キヤサリニア・マツキン著
「施設を出て町に暮らす」太陽の岡地奈緒
「死刑囚の妻」佐藤友之著

「暮らしてみたい中国」斎藤道彦著
「上海のころ多事壇然」趙夢雲著
「田中清玄自伝」田中清玄著
「盲流」葛城、原維英著
「フエミニズムの困難」吉澤夏子著

特集

変遷

窓

1994 SPRING

19

私の実感的大学像⑨「知の牙城」から社会的サービス機関へ
 大学評価の現状と課題⑩アラクホックスと化した大学に未来はない
 何のための大学改革か⑪濠田小彌太教授の大学改革論への疑問
 文化の焦点としての大学⑫都市の文化の創造的担い手たれ
 文部省はわかっているか?⑬大学改革論議の盲点を探る

歴史における善意と肅清
 ジェンダー・バイアスのインパクト
 ショーア

- 証人 坂本 隆
- 大内 聖三
- 小野 健三
- 小田 雄次
- 上田 紀行
- 井下 理
- 島田 裕巳
- 守 一 雄
- 岩田 年 浩
- 川 人 樽

- 小浜 逸郎
- 有本 章
- 大庭 健
- 関 敏野
- 天野 都夫
- 西尾 幹二
- 加藤 哲郎

全国大学教員インパクト



定価1700円(本体1650円)

ISBN4-943983-77-4 C3030 P1700

いわゆる椿発言について

大内要三 2

解説

歴史における善意と肅清

加藤哲郎 190

手紙

ロシアの政治はどこへ

ジズネーシエフ 180

調査

政治意識からみた現代学生気質

小野耕二 152

アンケート

- 高橋彦博 岡田裕之 平井俊彦 丸山昇 木村明生 富岡倍雄 加藤哲郎 後房雄 今井義夫 松田博 三宅明正 村井紀 糸山東一 池上慎 林正樹 大門正克 高屋定國 池谷尊夫 佐伯信男 密田小彌太 加藤哲郎 後房雄 今井義夫 松田博 三宅明正 村井紀 糸山東一 池上慎 林正樹 大門正克 高屋定國 池谷尊夫 佐伯信男 密田小彌太

121

天野郁夫 西尾幹二 56

現

現代美の試み

映像による宗教学 島田裕巳 98

●三ノノを習得させた

ピラオからの歴史学 小田部雄次 94

●近現代史の醍醐味を伝える

現場からの法律学 川人博 88

●社会科学教育への提言

元氣の出る文化人類学 上田紀行 115

●教養というイデオロギ

発見させる経済学 岩田年浩 106

●身の生き方をくりぬくため

副読本による教育心理学 守一雄 102

●授業は学問のCMタイム

後心

文化の焦点としての大学

関野 12

後心

何のための大学改革か

大庭健 24

後心

大学の現況と課題

有本章 38

後心

私の実感的大学像

小浜逸郎 49

後心

特集「変えよう！ 大学」

往復集「ニコリエント」から大塚真理へ
ジェンダー・バイアスのインパクト
●家庭と職場の平等のキツチが1つの解明

ジズネーシエフ 6

私の実感的大学像 ● 知の牙城から、社会的サードセクターへ

小浜逸郎 49

● 社会科学教育への提言	川本博	88
● 現場からの法律学	川本博	88
● ビデオからの歴史学	小田部雄次	94
● 近現代史の醍醐味を伝える	小田部雄次	94
● 映像による宗教学	島田裕巳	98
● 「三王」を再考する	島田裕巳	98
● 副読本による教育心理学	井下一郎	102
● 授業は空間のCMタイム	井下一郎	102
● 発見させる経済学	岩田年浩	106
● 身の生き方をくりあけるために	岩田年浩	106
● 元氣の出る文化人類学	上田紀行	115
● 教養というイデオロギク	上田紀行	115

121

天野郁夫 56
西尾幹二

梶田孝道	長尾他一	高橋彦博	岡田裕之	平井俊彦	丸山昇	木村明生	富阿倍雄
加藤哲郎	後藤哲郎	勝雄	今非義夫	松田博	三宅明正	西川潤	齋田小彌太
松葉正文	田如理一	大江泰一郎	小林公司	奥村宏	村非井	梅津和郎	佐伯信男
中山茂	林力	中村平八	大哉龍介	藤田肇	糸山東一	池上梓	林正樹
佐久間正	中津孝司	豊下猶彦	中野徹三	堀江宗生	羽場久泥子	石井潔	大門正克
阿曾正浩	黒沢惟昭	重本直利	中島篤之助	上原一慶	佐々木建	河西英通	池谷寿夫
林俊夫	如孝一	真田哲也	照井日出彦	若森章孝	横倉弘行	松浦良充	鶴田助
島崎隆上	武上島	山田銳夫	木村英亮	松本博一	宮澤浩一	松原小夜子	上杉孝賢
川崎淡	吉田正岳	柳雅春	喜多村和之	吉原栄徳	海野八尋	田中宏	小山洋司
衛藤潘	吉田正岳	柳雅春	喜多村和之	吉原栄徳	海野八尋	田中宏	小山洋司

小野耕二 152

● 『名産大学』法学部生への意識調査の結果から	小野耕二	152
● 『ローアの政治はどこへ』	小野耕二	180
● 『蘭の男』野坂参三の百年の謎み方	加藤哲郎	190

加藤哲郎 190

いわゆる椿発言について	大内要三	2
『チベットの死者の書』の一人歩き	江本嘉伸	4

大内要三 2

『状況ノート』死刑再考	『死刑廃止論・第三版』死刑の(昭和史)	『戦後死刑因外伝』死刑執行人の苦悩	住吉雅美
『研究ノート』物象化論『存在と意味・第2巻』近代法システムと批判	米谷匡史		
『自立生活の思想と展望』	村山正樹		
『サイ・アシン』	市野由香		
『サカルチャリ神話解体』	北沢三朗		
『怪談使いと少年』	加藤秀一		
『戦争・ナチズム・教会』ひとり家族『貧乏は正しい』	『空想哲学スクー化』	編集部	

184

窓

季刊

第11号

1995

歴史における善意と粛清

『男』野坂参三の百年』の読み方

加藤哲郎
Kato Tetsuro

「私たちの歴史」から「人間の劇」へ

R・ワックスの愛した標語「すべてを疑え」の精神で、これまでの文字で書かれた歴史は男たちの歴史であった、と喝破したのは、フエニストの歴史学であった。歴史には男性中心の価値観がインテラスとしては込まれており、それを規範にした現実の暗黙の絶対化がなされている、もつと文書に現れぬ日常世界に目を向けて、個人人の生きた現実と生活に即した女たちの歴史が書かれなければならない、というのである(J・W・スコット『エンタール歴史学』平林桂、一九九二年、参照)。

かつて平野謙は、一九三三年末の日本共産党中央委員官本願治・持田里見らによる大衆譏諷・小畑麗夫に対するスパイ査問

R・ワックスの愛した標語「すべてを疑え」の精神で、これまでの文字で書かれた歴史は男たちの歴史であった、と喝破したのは、フエニストの歴史学であった。歴史には男性中心の価値観がインテラスとしては込まれており、それを規範にした現実の暗黙の絶対化がなされている、もつと文書に現れぬ日常世界に目を向けて、個人人の生きた現実と生活に即した女たちの歴史が書かれなければならない、というのである(J・W・スコット『エンタール歴史学』平林桂、一九九二年、参照)。

かつて平野謙は、一九三三年末の日本共産党中央委員官本願治・持田里見らによる大衆譏諷・小畑麗夫に対するスパイ査問

れが「政治の劇」に転化していく悲劇をも、モスクワの旧ソ連邦公文書館から発掘した史資料を用いて、意外に淡々と記述している。

その頂点は、野坂参三が、同じ在モスクワ日本共産党代表として「同志」であり「列強の友」であったはずの山本懸藤を、コミンテルン(共産主義インターナショナル)指導部と連袂して「同志」であり「列強の友」であったはずの山本懸藤を、フアシムに反対する統一戦線を論じた『日本の共産主義者へ件や人民職権事件として権力の弾圧を招くようになった時期に、モスクワでは野坂が山本をスターリン演習機嫌にひそかに売り渡し、三十七年一月二日の山本の逮捕、三十九年三月一〇日の銃殺刑に導いた。しかも野坂は、その事実を半世紀以上も隠し続け、ソ連共産党にひそかに連絡して山本の死七周年を偽り、山本の葬儀の日本帰国を意識的に妨害してまで「愛される共産党」のシンボルとしての自己の地位を守り続けようとした、というのである。

そこで明らかにされた諸事実は、今日の日本共産党員のみならず、共産主義運動と多少とも関わった経歴のある(おそらく百万人以上)人びとに対しても、激しい自己点検と内省を迫るものであろう。野坂参三は、日本共産党の創立期メンバーと

して一世紀を生き続け、一九九三年一月一四日に亡くなった野坂は、戦前日本共産党「コミンテルン日本支部からモスクワのコミンテルン本部に派遣され、片山潜の没後はコミンテルン幹部会員となつた最高指導者であった。戦後の日本共産党指導部の押しもおされぬ代表・最高幹部・国会議員であり、没する一年前まで各著書で「同志」であった。その彼が、「同志を密告し、死に追いやり、しかも日本共産党と社会主義のために」沈黙しつづけたという重い現実を、どのように受けとめるべきなのか? 綱領・テーゼの変遷や天皇制権力との闘争という男たちの歴史(たとえば村田四郎『コミンテルンと日本』全三巻、大月書店、一九八八年)では明らかにできなかつたワラの世界が、ソ連崩壊という思わざる歴史の展開で、オモテに現われた。これはハクスキーパーの問題とともに、もう一度論じられなければならない。男たちの英雄伝説で彩られてきた七〇年について、女たちの歴史が書かれなければならない。それは、かつて丸山真男が提起した「共産党の戦争責任」にも連なる(『戦争責任論の盲点』『戦中と戦後の四』みすず書房、一九七六年)。

密告者として除名された野坂参三の寂しい死

本書『男』は、もともと『週刊文春』誌上で九二年九月一月に連載されたドキュメントをベースにしている。それが

下巻(新日本出版社、一九九三年)のようになり、日本共産党側の独自の調査による見解も発表されている。だが、不破の分析は、もっぱら戦後の日ソ両共産党間の「内通」関係をたどり、問題の起源である戦前の党史には、ほとんどふれていない。もともと戦前日本共産党はコミンテルン日本支部であり、スターリン崩潰は自党の「党内問題」だったはずだが、不破の視角からすると、あたかも戦前もソ連共産党が加害者、日本共産党が被害者に見えてくる。また不破の本は、『闇の男』のように典拠とした資料を全文公開するからとつていない。日本共産党は、旧ソ連公文書館秘密文書について「ソ連側の関係者らは、秘密が明らかに出来ないことに安心しきって行動し、あけすけに書いておき、その内容は懐疑性があります」(『泰西』九三年八月二六日)と、その資料的価値を認めているが、たとえば『闇の男』で「巻末資料2」として全文訳載されている山本の選挙ラッパの六三年三月二日付けソ連赤十字社での面談記録は、不破の本では自分の論旨に都合のいい一部が引用されているだけである。これに対して、『闇の男』は、『週刊文春』連載時以降の探求の成果も豊富に盛り込み、モスクワ公文書館の日本人失踪関係基礎資料を全文訳載して研究者にも公開して、価値あるドキュメント

による沖縄出身アメリカ共産党員の行方探求・放映(等に神韻しと製作「遺棄された沖縄県人」九三年一月二日)、本書の著者ら文藝春秋取材班による資料発掘によって、一挙に二〇名以上の冤清犠牲者が明らかになり、岡田のほか永井一や寺島健蔵のような生存者の証言も得られるようになった(『永井喜年』女版、岡田嘉子、文藝春秋社、一九九三年、永井証言は『闇の男』第三章、寺島の回想は『長い旅の記憶』日本経済新聞社、一九九三年)。

一九三六年二月当時のソ連在住日本人共産主義者は、本書一三八頁のコミンテルン日本問題委員会報告では、日本共産党員七人、アメリカ共産党員とソ共産党員を合わせて三人の計二〇人、非武装政治亡命者一四人を加えると計三四人である。当時の日本側官憲資料では、三四年九月段階で三八人(『社会運動の状況』昭和十年)、三六年二月現在で三二名(三二名(『機外事務警察概況』昭和二年)、アシマム七八人(『思想月報』第三号、昭和二年三月)とされるが、そのほとんどが崩潰の犠牲者であることが、本書により明らかになった。

逆にいえば、生き残った野坂参三を例外とした。本書によれば、野坂の毒電も逮捕・拘禁され、野坂自身も確実に冤清対象者に入っていた(ただし野坂電の拘禁は『社会科学辞典』一九九二年)のいう六月まではなく五二日間、本書一三六・一六一頁)。生き残る道は、自らがNKVDの手先になることだった。それが、コミンテルン日本支部(日本共

本書のハイライトである野坂による山本隠蔽の「密告」については、決定的証拠となった一九三九年一月九日付けライムトロフ宛手紙(巻末資料1)がそのまま英文から翻訳されており、多言を要しない。著者たちは、野坂が挙げた山本への九つの嫌疑を、野坂の自伝『風雷のあゆみ』全八巻(新日本出版社)などと比較検証し、それぞれの根拠を問いつけている。そして、野坂が三一年三月の日本脱出・入ソ時からソ連秘密警察(GP)U、三四年七月からNKVD)のエージェントではなかったかという疑惑を提起し、立花隆を加えた著者らの座談会では、野坂が日本の特高警察、ソ連の秘密警察(ないし赤電)、アメリカ占領軍(ないしCIA)などの多重スパイとして活動してきたのではないか、さらにはゾルゲ事件にも関わるのではないか、とそれなりの根拠をもって論じている。ここで野坂は、まさに「汚れた英雄」であり、『闇の男』である。

研究史上における本書の画期的意義は、スターリン崩潰による日本人犠牲者を新たに発掘し、それがこれまで知られていなかった規模であることを示し、その経緯の概要を明らかにした点にある。山本隠蔽以外の日本人犠牲者の名は、これまで医師・川上武や私が発掘してきた国崎定洞、それに三八年正月に梅太から国境を越えた杉本良吉、岡田亨子の「邪の越境」のケース以外は、ほとんど知られていなかった。それが、フジテレビ

野坂・山本の対立の起源としての国崎定洞問題

山本以下二〇名以上の冤清犠牲者は、沈黙の間の中から春だけが回復された。私は、この崩潰「名譽回復」という共産主義運動のタミノロジに、深い異和感を持つ。実は、私自身が、本書にも登場する、元東大医学部助教で、留学中にドイツ共産党員となり反ファシズム活動に従事、モスクワに亡命して発掘された国崎定洞の生涯に関心をもち、ドイツで国崎らの組織した左翼革命的アジア人協会関係資料を発掘し、日本で七五年に名著回復を確立した運動にたずさわってきた。本書『闇の男』の出現で、国崎定洞の生涯と死についても、これまでとは別の角度から、考え直さなければならなくなった(川上武『沈黙の革命』同、一九七七年、加藤「国崎定洞」『日本の統一戦線運動』労働旬報社、一九七六年)。

「闇の男」の焦点である野坂(岡野)・山本(田中)関係にお
いて野坂は三九年の「タイム」宛手紙で山本の九つの疑惑
をあげ(本書「参考文献1」)山本の妻関マツは、三八年一月
の横濱で、すでに逮捕されたコンニ國崎定洞と野坂夫妻の関
係を日本に帰国・転向したカワタ細本様三とのつながり、そ
れを告発している(資料3)。事実関係の疑惑で、両者の告発の
交錯する点は、実はただ一つ、國崎定洞が片山潜に伝えたとき
れる、結核で三・一五逮捕を免れた山本による、一八年五月の
特高警察監視下での逃亡、六月入りの件のみである。
この関係の重要性について、著者たちは、本文では詳しく述
べていない。ただし、参考文献に、一九三五年二月九日付國
崎定洞に関するコンニからNKVDへの報告書(資料5)
と一九五九年一月九日付「國崎定洞の名替回復決定書」
(資料6)を収録することで、読者に問題の所在を暗示してい
る。私の関心は、ここから出発する。
國崎定洞の足跡を追ってきた私や川上武にとって、実は
この二つの資料は、晴天の霹靂であった。スタリリン粛清の日
本人犠牲者の中で、比較的早くからその解明が進んできた國崎
定洞研究にとっても、三年九月の連亡命後の國崎については、
アレクサンダー・コンという連名や、ドイツ共産党籍のまま
外国労働者出版所で働いていたこと、スペイン義勇軍に志願し

ていたことが確認できる(二九頁以下)等々。この研究史上
の功績は、たとえ本書の商業主義的動機や資料公開の不十分性
に異論があらうにしても、どんなに強調しても強調しすぎる
ことはない。
私は、自分の専門領域の一つであるコンニテロ史研究(加
藤「コンニテロの世界」青木春房、一九一年)の立場からも、個
人的にすすめてきた國崎定洞の生涯を採求する立場からも、不
破のいう「干渉と内通」の歴史的生成過程に関心をもちた。ま
た、國崎定洞に関する貴重な資料が明るみに来た以上、それ
をペルリソで存命中の遺児マツコ・レトリヒさんに届けるの
が、義務であると感じた。そこで、『闇の男』の著者たちに、
公開された國崎関係の資料のロシア語原文コピイを見せてほし
いと申し出たところ、著者の一人である小林峻一氏から「國崎
定洞マツコ」のコピイの提供を受け、「名替回復決定書」と
ともに簡単な解説をつけて、それをマツコさんに送ることがで
きた。また、日本の國崎家の方にも、「名替回復決定書」や自
筆日本語履歴書、パスポートなどの遺品を、半世紀ぶりで届け
ることができた。
九年のクリスマスに、今年五五歳になるマツコさんからは、
タイアで淡々としたためた、長文の礼状が届いた。「本当にあ
りがとう。でも残念ながらロシア語は読めないで、父が下
ッ語で書いた履歴書を、繰り返し読みました。今となっては、

明らかにされた新事実

一九三〇年代コンニテロ日本支部日本共産党のモスクワ
での活動については、従来、「三二年マツゼ」などコンニテロ
の機関紙路上での日本に関する報道、決闘、「国際通信」など
主としてアメリカ経由で日本に流入した宣伝文書、幹部委員で
あった片山潜、野坂参三の回想、評伝、クイト出身者などソ
連からの帰国者の回想、逮捕された帰国共産主義者の供述書
(日本側宣誓資料)、それに他國のコンニテロ関係者の官及な
どによる再構成の道しかなかった。本書の刊行によって、ここ
に新たに、コンニテロ本部・東洋部、旧ソ連國家・共産党、
赤軍、秘密警察などの、三〇万歳以上のほる(一九頁とい

たこと、三七年八月四日に突然逮捕されたことなど、主として
七四年に鈴木東長が西ペルリソで存命のフリダ・レトリ
ヒ夫人を奇跡的に探し出し、その証言によって明らかになっ
た断片を除いては、ほとんど闇のままであった。
一九二二年に、ソ連解体を受けて、日本共産党がロシア政府
に問い合わせた結果は、山本懸蔵、國崎定洞、杉本良吉の「統
一致」と「名替回復」年月日、山本、杉本の埋葬地(國崎は不明)
を明らかにしたが、それぞれの筋書の具体的嫌疑、経緯は、不
明のままだった(「赤旗」一九二五年五月九日)。本書の著者たち
は、このうち山本の死亡年月日三九年三月一日と、かつて日
本共産党が発表し定説となっていた四二年四月病死説の矛盾を
つき、モスクワの旧ソ連各種公文書館で日本共産党員関係のフ
ァイルを探索し、この三人以外の多くの犠牲者名を発掘して、
ついに野坂の自筆密告文書と野坂による山本死亡年改ざん工作
の証拠にたどりついた。
いかにすれば、モスクワ公文書館史資料は、新資料にまっ
たく新しい光をあてることになった。たとえば「資料4」の
「関マツの除名決定書」の経歴欄からは、彼女が当時のコンニ
テロの實質的心的幹部である秘密機関オムス(OMS、国際連
絡部)の日本人機関員であったことが、初めて確認された(二
三四頁)。「資料1」の野坂の「タイム」宛手紙からは、山本
懸蔵がオムスの高官「ラモフ、ミューラーらと一緒に活動し

ル」は、本書の著者たちが収集したモスクワ日本関係史資料の

ほんの二部にすぎないものであるが、その内容は、これまで

川口松太郎の國崎定洞研究にも、重要な新事実を付加するも

ろくである。

國崎定洞について、本書『闇の男』は、『國崎フアイル』の

一部である先述二資料などを公衆した。これによつて、従来知

られていなかった、次の諸点が明らかになされた。

第一に、なぜか「國崎フアイル」に入つていた「資料3」の

関マツ供述番から、一九三三年九月にナチの台頭するベルリ

ンからモスクワに亡命してきた國崎定洞をクート（東洋勤労者

共産主義大学）に入學させるか否かについて、野坂参三と山本

隠蔵の間で対立があつたことが推定できる（山本は國崎受け入

れに反対したが、片山潜と野坂が入學させた。その背景には、

野坂が、二八年三・一五事件のさいに山本が「香助的に」逮捕

をまねがれつに連に渡つたことに不信を抱いていたことがあつた。

しかもその疑いの根拠は「ベルリンの日本人共産主義者グルー

プを経て、一九二九年、には同志片山のもとに届いた「彼

（山本）に不利なる噂」であつた。また山本夫妻の方は、そ

の「噂」の出所を、ベルリンの國崎が片山に手紙を書いて伝え

たものと思ひ込み、逆に國崎を早くから「大物スパイ」と疑つ

ていた。つまり、野坂と山本の不信と対立の原因に、二八一一

え子である神岡出身日本人共産主義者たち（島袋正栄、宮城與

三郎、照屋忠盛、又盲達）は「大物スパイ」國崎一派として翌

三八年に逮捕され、野坂とのつながりなどの自白を強要された

うえ処刑された（照屋のみ行方不明、一四三頁）。そして、五

九年七月によろやくKGB犯罪調査局で再調査が開始され、一

〇月二九日付けで國崎の無実が公式に認められて、ソ連最高裁

判所軍事法廷で名誉回復が決定された。

山本隠蔵の蘇蘭ツツの場合は、一九五六年の名誉回復に伴い

山本の名誉回復依頼を受け取つたというが（本書七四頁）、か

つて國崎定洞夫人故フリタ・トトリとさん（一九〇八年病

没）は、在ベルリン・ソ連大使館から國崎がすでに死んだこと

のみを口頭で伝えられた。七五年夏に、三七年二月一〇日の

獄死——當時は銃殺とばされていなかった——と五九年の名譽

回復の事実がわかつたさいも、正規の書類は誰も見たわけでは

なかつた。だから、このドキュメント（本書「参考文献」）は、

フリタ夫人、遺児ツツコさんとはもとより、戦後も長く國崎定

洞のことを考え、安否をきかつてきた日本の多くの友人たち

——ベルリンの消息を共にした有沢広巳、嶺山政道、土屋喬雄、

谷口官彦、舟橋暎一、山本勝市、堀江昌一、平野義太郎、高野

岩三郎、菊地勇夫、雄川虎三、山田勝次郎、千田是也、勝本清

一郎、佐野碩、鈴木重良、三枝博音、服部英太郎、三宅麗之助、

藤森成吉、島崎齋助、山西英一、郷野瀧洲雄、野村平爾、喜多

流、國崎のソ連亡命・クート入學問題があつた。

第二に、「資料5」の秘密警察（NKVD）文書から、一九

三年九月に入つし、モスクワでクートに入學し、クートで

ヤリアンで東洋学研究所の講師を勤めながら三四年七月から

外國労働者出版所日本部長として働いていた國崎は、すでにコ

ミンテルン第七回大会前の三五年初め（キプロ暗殺直後）に

はソ連の秘密警察NKVDに疑われて、「日本共産党の活動に

とつても危険」な要監視人物となつた（三五五頁）。その交

友関係がひそかに調査され、特にベルリン時代からつながる小

林陽之助、外國労働者出版所の同僚である野坂夫人竜、伊藤政

之助（東洋学研究所で國崎の教え子）らの身辺も疑われ調査

された（外國労働者出版所には、片山潜の娘安子や土方与志夫

人梅子も働いていた）。

第三に、「資料6」の「名誉回復決定書」によると、國崎が

スターリン演習最盛期の一九三七年八月四日に逮捕され、二

月一日に銃殺刑に処された公式の直接的理由は、なんと二四

年（國崎の東大医学部衛生学講座助教授在官時）から日本の陸

軍参謀本部情報部「タクダ」のスパイであつたといふことであ

り、その証拠とされたのは、タクウチル伊藤政之助とA・S・

トリッチの別件での自白証言であつた。ユク、バク、ニユ、

ゾイといふアメリカから入つた、東洋学研究所で國崎の教

もうひとつの極秘資料①

——山本隠蔵のモスクワ亡命の会談記録

「國崎定洞フアイル」は、約二〇点のロシア語・ドイツ語・

日本語資料から成る。その中には、法廷裁判記録はなかつたも

の、『闇の男』に公衆された「資料3・資料5・資料6」の

ほかに、本書では用いられず、しかつて未発表のドキュメン

トが入つている。多くは「極秘」と記されたこれら未発表資料

を脱むと、さらにいくつかの疑問が湧いてきた。

私の結論を先取りすると、國崎定洞とベルリン日本人反帝グ

ループの活動全体が早くから山本隠蔵に「疑に反対」「スパイ

と疑われ、それが、三年秋の片山潜暗殺、三四年春の野坂参

三訪米後の三四年秋に、NKVDに「報告」ないし「密告」さ

れ調査されて、野坂と山本の疑心暗鬼と対立、山本・國崎ほか

二名以上の在モスクワ日本人崩潰（および佐野碩・土方与志

ら（國外退散）の背景となつたことが、推定できる。

次の資料（ロシア語からの翻訳は、富山大学藤井一行教授に

お願いした）は、一九三四年九月一九日付けのコミンテルン組

総部コナリニコフの田中(山本懸蔵)との会談記録である。この記録をまとめたコナリニコフは、最新のフイルソフらの研究で、コミンテルンの人事・財政を握る組織部の実務官俣で、廣田内閣には人事部長に出世し「札付きの密告屋」といわれた。在露ニキ豆。同時に、コミンテルン機構内のソ連生産党をスクラ地区コミンテルン細胞委員会充番記で、三四年末にはサフロフ、アジャイルらを告発したNKVD要員である。

なお、「國情ファイル」のこの九月一日付け記録には、まったく同文で第一・二・三・九・一〇項の全五項目のみから成る九月三日付け異文がある。山本の証言が重要と認められ、コピーが作られたが、なせか第四一八項の指導部内対立片山・野坂・ゾルクに対する山本の不信に関わる供述がいったん削除され、当時のコミンテルン国際統制委員、ソ連生産党中央統制委員ア・ソリツのサインが入っている(新資料①)。

三〇年根本・勝野冤罪事件、三四年勝野逃亡事件

この記録の解読には、いくつかの注釈が必要である。第一に一九三四年九月というその会談時期、第二に当時のモスクワでの山本懸蔵の立場、第三に日本国内での日本生産党の「スパイ・北米との闘争」である。この三四年秋とは、日本生産党が、前年の選挙で、山本懸蔵の松岡組から宮本顯治・袴田里見ら

によるリンチ者間致死事件を経て、「多数派」問題から三五年三月の中央委員会撤滅にいたる時期である。リンチ事件に関し「日本生産党は個人的テロルの使用を非難する」とする野坂(野坂)の論文「党提議者を一掃せよ、党分裂者を粉砕せよ」がコミンテルン英文機関誌に發表されたのが三四年九月だが、このころ野坂は、すでにアメリカに渡っていた。山本懸蔵は、三三年一月の片山播の死去と三四年三月野坂渡米のことで、この時期は、在モスクワ日本生産党代表になっている。

山本懸蔵は、先述した二八年三・一五事件での逃亡時の「疑跡の噂」(および二九年秋、コミンテルン本部の第一次「露清運動」)をなかに起こった、自分が推薦したクレーン学生「松田ニコライ」の日本大使館への逃亡事件)によって、おそろしく二九年秋から三〇年のある時点で、コミンテルン組織部ないしソ連秘密警察の尋問を受けた可能性がある。野坂のフイルソフ宛手紙の「田中「山本」の話によれば、この問題はコミンテルン執行委員会の機関で提起されて解決済み(本書二九頁)というのは、この意味であろう。山本を告発し査問したのは、「日本プロレタリアートの父」片山播であろう。

この点を、三八年の関マツ供証書は、一九二八年、コソ國「断」がベルリンから同志片山に手紙を書いて、田中「山本」は九三年「野坂訪ソ時」に知ったのに、なせ今まで田中「山本」

* 以下、タイプ印刷部分の翻訳。郵便に手書きの書き込みいろいろあり、脱記號帳と判せられる箇所は、修正して取出してある。— 訳者

△秘録△ 同志タナカとの会談の記録

一九三四年九月一日の私のとの会談で、同志タナカは以下のよう報告した。

1 カタヤマの秘書ハヤシ(カツノ・カネサ)は、同志コソによって推薦された。ほかならぬ彼によつて、一九三〇年にソ連に來たある日本人が推薦された。タナカはその人物の姓は覚えておらず、彼が今どこにいるかも知らない。それはゾルクが知つて居る可能性がある。

2 ドイツに、ゴッ、セイダ、ヒサナ、カツモト、シマザキ、ヨサノというメンバーからなる日本人グループがあった。カタヤマは、このグループと文通していた。現在の彼らの所在は、コソがモスクワ、セイダは日本で非党員の芸術家、ヒサナは日本で反共産黨闘争を行なつており、カツモトはフランスムにのみし、シマザキは反共産主義者闘争を行なつており、ヨサノはドイツでフアシストの通信員になつて居る。

3 このグループは、反帝國主義同盟となつて居る。

4 カタヤマはこのグループと文通していたが、タナカは反対だつた。彼らは雜誌『セツキ』を受け取つていた。警察は彼らにこのグループの助けをかりて、日本の一連の共産黨員を對あつた。

5 このグループはカタヤマに手紙を送つていた。彼の秘書ハヤシはそれらの資料を読んでいたが、それらの資料をタナカ

6 タナカは、一九二九一三〇年にドイツにいる同志コソにあって、カタヤマに手紙を出さないように手紙を書いた。コソがこの手紙を受け取つたかどうか、そして彼がどうしたか、コソに尋ねる必要がある。

7 タナカは、コソをクレーンに受け入れることに反対であつた。しかし、オカノとゾルクが彼の受け入れに賛成した。タナカとのあつたの相互関係は、決して正當ではなかつた。また、そのような場合、コミンテルンの指導的幹部たちは、彼タナカではなくオカノを支持する、とタナカは宣明した。

9 タナカは、日本と連絡をとること、身元調査がついておらずコミンテルンから派遣されたのではない、他國在住者と連絡をとることに、断固として反対である。

10 一九三四年の五月か六月に、ある外國人旅行者がドイツからソ連にやつてきた。タナカはその姓をしらない。その旅行者はコソと会いたがつていた。しかし彼はコソがどこに住んで居るか知らなかつた。彼はモスクワにいる二人の日本人(二人は作家大会に参加していた)に連絡をとつた。その作家たちは、ドイツからきた旅行者がコソに会いたがつて居ると、キム・シヤンに電話した。キム・シヤンはそのことをコソに伝へ、かつ、その旅行者と会う必要はないと彼に言つた。それにもかかわらず、コソは彼に連絡をとり、彼と會つた。

一九三四年九月一日
〈サイインヴェフ・コナリニコフ〉
(藤井一行訳)

といふとに働いてきたのでしよう(三八頁)といふ。野

原は「この『山本疑獄』の噂は、ベルリンの日本人共産主義者
を以てして、一九二九年、には、モスクワの同志片山の
「こぼれ」を以てして」と述べている(三九頁)。この点で二人

の語は、共通している。

そして、この國降経由とされる「噂」は、実際に山本を死に
至らせた。「開ツの除名決定書」には、山本の答覆につい

て、「一九二八年、彼は逮捕をのがれた。何故なら、発熱して
家で寝ていたからである。彼が住んでいた部屋を警察の特別監
視員が見張っていたにもかかわらず、田中はソ連への逃亡に成
功した(三四頁)といふ一節がある。

これが、山本疑獄夫妻が國降定済を「大物スパイ」と疑い、
「密告」する背景となった。この点について、私は、山本逃亡
の「疑獄の噂」の出所は日本国内にあり、それが二九年九月一
三〇年一月のコンツルン本部の第一次「奮闘運動」期間中に
片山海らにより告発され、片山の依頼で國降定済が「警意のメ
ッセンジャー」をつとめた、といふ仮説をもつていたのだが、
詳細は別で述べることにして、ここでは全談記録そのものを
分析する。

田中・コナリニコフ会談は、三四年九月に行われ、記録第一
項は「ハヤシロ勝野金返」についての語から始まっている。勝
野を以て、本報社中之國降の文字で、フランス共産党で活

勝野によると、片山と勝野は、根本をモスクワで受け入れ、
シートに入学させようとした。しかし、片山の察察中に、山
本の調査で根本は非党員と判明し、スパイとみなされて逮捕。
国外追放になり、根本を受け入れた勝野自身も、一〇月末に逮
捕されるきつかけとなった。根本屋は、『無産者新聞』会計を
長く勤めた根本和子の実兄である。この山本の密告による冤罪
事件で、もともと嫌疑だった片山権と山本疑獄の關係は、対立
の頂点に達した。三〇年二月、片山は、山本の三・一五逃亡
疑獄の証人である医師馬島備をモスクワによんで、山本疑獄の
始末幕をとうとうとした。しかし、心労が重なり、重態におちい
る。野坂防は、その片山の入院期間中であるこの辺の片山。
三四年九月といふこの山本・コナリニコフ会談の時期は、ソ
連側は勝野再逮捕をねらったが日本大使館が拒否し、勝野が
「奇跡的に」日本に帰国した直後である。片山権の死、野坂防
米で在モスクワ日本共産党代表になった山本疑獄は、コナリニ
コフに勝野事件の事情を調査された。山本は、それを機に、か
ねから「噂」の発信者として不信を抱いていた片山を頼っ
て入ソした知識人、國降を、勝野事件にからめてソ連側に告発
し始めた。

ベルリン・グループへの不信と敵意

が二人の日本人スパイを摘発した三〇年秋の勝野||根本事件を
コナリニコフに伝え、同時に、國降定済の「スパイ勝野」(連
捕された時点で疑わしいが、ライプザック脱出後日本大使館に逃
げ込むことで、結果的に山本やNKVDにとっては自明となっ
た)とのつながりを具体的に伝え、ソ連側に告発している。

山本疑獄の國降への敵意は、前述「噂」の出所としての逆恨
みばかりでなく、ベルリン日本人共産グループ全体への政治的・
組織的不信であることが、この記録からわかる。

第二四項で、山本は、在独日本人共産グループメンバーの
名前をあげ、自分はこのグループを「概して党に反対」とみな
し、このグループから日本の警察は「連の共産黨員を知った
と考へ反対したが片山は文通していた、と前年投じた片山権ま
でを告発している。そのメンバーについて、山本は「コン、セ
イタ、ヒザナ、カヅエモト、シマザキ、ヨサナ」の名前をあげ
ている。これは、川上武や私の従来の研究から、コン||國降
セイタ||千田是也、カヅエモト||勝本清一郎、シマザキ||島崎
義助、ヨサナ||早野野謙と解読できる。「ヒザナ」だけは明確
でないが、他のメンバーの在独時期からして、「ヒラノ||平野
義太郎」のロシア語表記の誤りと考えられる(「疑獄の本巻」

動して国外追放になり、当時ドイツにいた平野義太郎・國降定
河の助けで、二八年三月に入ソした。モスクワで東方学院の日
本師範となり、片山権の私設教習を勤め、片山「自伝」完成
に協力したことは、従来の研究でも言及されている(平本義太郎
他「片山権」第二部、共栄社、一九六〇年、なほ勝野「赤旗脱出記」日
本評論社、一九三四年、同「ソシアリズム・今日の生活」千倉書房、一
九三五年、同「藤村文学・人とその風土」共栄社、一九三七年、同「研士
地獄」吾妻書房、一九三七年、など参照。

その片山秘密勝野は、片山が休職療養中の三〇年一〇月末に、
おそらく山本疑獄の告発で、突如G.P.U.にスパイ容疑で逮捕さ
れ、強制収容所に送られた。三四年五月末に懲刑免されて、
六月にモスクワの日本大使館に逃げこみ、日本大使館の保護で
七月末にソ連から出国、八月に日本に帰国して「転向して故國
へ」果して秘めるか究再庭の指針」と当時の新聞でも大きく
報じられた(「東京朝日新聞」昭和九年八月・二二・三四)。

また、山本が「名前をおぼえていない」といふ、國降に推薦
されて三〇年にソ連に来たある日本人とは、勝野「深土地
帯」および勝野逮捕直後の三〇年一月入ソした勝本清一郎
の回想「このころの遠征(朝日新聞社、一九六五年)によれば、根
本(トキ)といふ、日本で『無産者新聞』編集に關係し、ベ
ルリンの國降の紹介状をもって、三〇年秋にモスクワの片山の
ところによってきた、京大出身の青年のことである。

参照。この頃の山本が、『日本資本主義発達史綱要』の中心メ
ンバー平野を「日本で反共産党闘争中」とみなし、ハリコフ作
家會議日本代表で小林多喜二『一九二八・三・一五』の原稿を
命がけて守つた勝本を「フラスコ」と評価していたことがわ
かる。山本隠居にして、人間は「世貞」と「非党員」の二種
類しかないかのようなのである。

第五項で山本は、自分の反対にもかかわらず片山と勝野は國
崎らベルリン・グループと交通を続け自分にはそれをみせな
つた、とこぼす。レニングラートの「オコ」とは、風聞文吉獄
中手記に林川勝野ともにてくするエスプレッテイストの非党
員「日文夫」であろう（「非党時」共產党）。第六項では、山
本は、一九二九一三〇年にコンニ國崎に手紙を書き「片山に手
紙を出さないように」命じたとある。戦後書かれた片山山會見
記のなかで、勝本清一郎は、「ソ連邦から」片山との交通をや
めるよういわれたと回想しているから、これは事実であろう。
勝本はそれで交通をやめ、後に野坂参三にその理由を聞いた
した（「二つの連想」）。勝本の別の回想によると、國崎は、片
山のみならず野坂とも重要な交通をしていた（原本フログラ
フと私私。干田是也は、栗父と片山との長い交友関係もあり、
文通するなどいわれたこととはないと私に証言しているが、國崎
も何に山本の「手紙」をいかにこぼすか、それに國崎がどう対応し

促している。これは、次に見る「コナリニコフの國崎定洞及び
野坂竜との會談記録」に直接つながる。

新たに発見された極秘資料⑤

「コナリニコフによる國崎定洞と野坂竜の會談記録

一九三四年夏の勝野金政日本脱出事件をめぐる山本隠居によ
る國崎定洞告発で、國崎自身と野坂竜がコンニテレン組織部によ
らばれ、コナリニコフの尋問を受けた資料が、ここで紹介する
もう一つの未公開資料、三四年一月一日付け「同志コン
（國崎）およびキム・シヤン（野坂竜）の同志コナリニコフ
の會談記録」である。この文書にも、國際統制委員リツツのサ
ンが入っている。
このコナリニコフの會談記録によると、コナリ國崎定洞は、
ドイツ共產党日本本部のメンバーとして、「ナリ」和井田一雄、
コバヤシ小森殿之助（ソ連亡命後の名前リコシ）、ニシムラ
ト、喜多村治、トシヨリ野村平爾、オウリ大岩殿の名前をあげ
た。これは、大岩殿圖書（司法省刑事局「思想研究資料」第四三
号、昭和三年七月）や野村平爾の回想（『民主主義學に生きて』日
本評論社、一九七六年）とも、おおむね合致する。その後にある
名前には、たぶん山本が先の告発で干田是也の名を挙げたので、
國崎がコナリニコフに密告された名で、ホリエリ堀江昌

極秘資料④

「秘密」一九三四年一月一日

同志コナリニコフ、シヤンの同志コナリニコフの會談
に関する疑問について、このサークルは黨約には一五名にのぼり、
そのなかには三十五人の共產黨員「コムニスト」がいた旨を報告
した。黨員の人的構成は、「ナリ」コバヤシ、ニシムラ、トシ
ヨ、オウリ。現在、トシヨとオウリは日本におり、コムニテレン
ンに對する態度は不明、オウリは一九三四年の暮に、トシヨは
もつと後で日本に歸つた。トシヨにシムラは逮捕され、いま
スウエーデンに在るが、コナリは、彼がまだ黨員のままだと
考えている。コバヤシ（リ・コ）はドイツで逮捕されたが、釈
放され、一九三三年にソ連に來た。現在「セクラー」に「ク
ト」日本人部」に在る。シヤンは、彼がいまどこに在るか承知
していないが、彼が黨員だと考えている。あとのメンバーはソ
ンパで、現在ではほとんどみな日本に在る。
ホリエは一九三三年に逮捕され、「キヤキ」は一九三四年に朝鮮
で逮捕された。イトは一九三三年に日本で逮捕された。ヤード
は日本で逮捕されたが釈放された。チランも逮捕されたが釈
放された。ドイツの日本人サークルにいた他の旧メンバーの消
息はコンには不明だが、彼らは活動しておらず党とのつながり
はないと、コンは考えている。
一九三四年七月、ツエソソコがモスクワにきて、一月いた。
彼の入國の目的は、ソ連情勢の視察である。彼は（オ）「第一
回作家大会に参加した演劇芸術活動家」のところに滞在してい
た。コンはツエソソコと一晩、七月十九日に會つた。彼は一
箱に街を歩きまわつた。二人は前にベルリンで知り合つていた。
彼はソソコとして日本人のサークルに入つていた。現在彼は

第七。八項で、山本隠居は、國崎のベルリンからモスクワへ
の受け入れとクート入学の件が、野坂と山本の「正當とはい
えない相互關係」の始まりであつた——三二年時点では山本は
反対、片山と野坂は國崎に好意的——と告白している。また、
ヤ・ヴォルクラフ・コンニテレンと野坂はいつも野坂の側に立つて
いる、と不満を述べている。山本にとつて、誰をクートに入
学させるかは、一九年秋の松田述正事件、三〇年秋の根本・勝
野事件の経験からも重要であり、知識人出身者を重用する片山・
野坂に不信を抱いたのだから。ちなみに、この三年秋には、
國崎定洞だけではなく、山本の妻關ツツ、野坂の妻意も、ク
トへ入学している。そのさい、關ツツが山本の指示で履歴を
偽つたことが、後に彼女の除名の理由とされた（本書三五頁）。
また、後に野坂は、この關ツツの経歴詐称は「私が初めて暴露し
たものである」とコムニテレンの密告の最高責任者「ミトロ
フ」に伝え、自分を売り込んだ（三二頁）。
第九項のように、そもそも山本は、第三國の非黨員經由や非
公式ルートでの日本との連絡一般に「断固として反対」したよ
うである。そのことに関連して、第一〇項で山本は、國崎がモ
スクワにきた「ある外国人旅行者」と會つたことを、コナリニ
コフに思わせむらに告げている。同時に、二人の會見を仲介し
た「作家大会に参加した二人」松野碩と土方年志「および「キ
ム・シヤン」野坂竜」にも疑念を及び、コナリニコフの注意を

ルンについて、宣葉とマルクス主義を勉強している。その旨を、コソの啓明に述べ、彼はドイツ共産党に協力して、工場の新聞を印刷しており、他の地区委員会と提携している。前に彼は、一九三三年に日本からドイツ共産党のためにやってきた。彼の肉親はインツリで、兄弟である。彼は、ドイツに三名からなる日本人グループがおり、彼らがドイツ共産党に協力して、市電労働者向けの新聞を印刷していることを、コソに伝えた。この三人組の一人であるアタチは、ドイツで合法的に日本の新聞を発行している。自由主義的な傾向の発行部数五〇〇部の日本語の新聞である。このグループの三人目は、キムという姓の朝鮮人で、勉強して、やはりグループにいて、その一員としてドイツ共産党に協力している。

ミナミについては、ツェンゴはコソに、ミナミはパリにいて、やはり同様にドイツ共産党をつながりをもっている、と伝えた。ミナミはオカノとつながりをもっている、日本から雑誌『セツキ』やその他の資料を入手するのに協力している。いまは連絡が悪いが、その理由はコソには不明である。

その年の夏、ロンドンからモスクワへ、イノウエという日本人がやってきた。サノは、オカノの葉のキム・シヤンに、このイノウエの到来を手紙で伝えた。イノウエは、ミナミとつながりをもっており、ミナミからのオカノ宛の手紙をもってきた。この手紙は、オカノの葉へ渡された。コソは、イノウエとは会わなかったし、晤もしなかったし、彼をよく知らないし、報告ししている。ミナミは、ベルリンの新しい住所を伝え、また、自由主義的な新聞で働いて金をかせいでいるので、援助がなくても生きていけると伝えた。さらにコソは、イノウエの妻がモスクワにきたことを伝えた。コソは、彼女を知らないし、彼女がど

「ミナキリ三宅鹿之助、イトリ千田是也（本名伊藤園吉）、ヤドリ山田勝次郎、チランリ平野英太郎と、二〇年代末在独日本社会科学研究会の学者グループ・メンバーの名前と解読できる。

問題は、一九三四年七月にモスクワに一月滞在したという「ツェンゴ」である。彼は、佐野碩のもとに滞在し、勝野ノ進脱出直前の七月二日に園崎と会い、ナチ政権下で（三四年六月のレム事件後も）活動しているベルリン日本人反帝グループのその後、ミナミと和井田一雄の近況や勝野金政の逮捕・解放の事情などを、園崎に伝えた。園崎は、たぶん正真正正に「ツェンゴ」の語の丙答を、コソに答えている。しかし、コソは、ミナミと共に出撃して、先づ山本啓吉があるので、「ツェンゴ」と勝野の関係を重視し、「不審な外国人」とみなしている。

コソは、ミナミのキム・シヤン野坂電への尋問は、簡単にである。野坂電は、佐野の湖でドイツから来た日本人を園崎に紹介し、園崎に会うべきでないといつたにもかかわらず園崎は会った、と逃げ腰で、どうやら事件に巻き込まれたい様子である。

この「ツェンゴ」が誰であるかは、まだ確證できない。この記録には、本名（小林陽之助）とパーナイ・キム（野村平南）が混在し、どちらであるかが判断できない。「ツェン

に仕込んでいるかも知れない。このことについては、サノがオカノの妻に伝えた。

コソは、一九二八年にベルリンでカツンに会った。カツンはフランス共産党の党員であった。パリで逮捕された。数日間そこにいた。ドイツに追放された。ドイツで彼はコソの知合いであるトランに連絡をとった。トランはカツンにコソの住所を教え、カツンはコソのところを二日間いた。カツンは、フランスのモツブル「国際赤色救援会」がドイツのモツブルへあてた手紙をもつていた。コソは、その手紙をモツブルへ渡した。カツンはドイツ・モツブルの助力でソ連にきた。コソは、その後、はカツンに会っていない。その後のことでは、彼のカタヤとツェンゴは、カツンについてコソに、彼がソ連で逮捕されたと言った。白海運河の建設場で働いていたが、日本の官吏の要請で釈放された後、彼らの管轄下に移された。コソは、カツンに彼は彼に、妥当とは思われないと答えた。それでも、コソは会った。

同志キム・シヤンは、セツキ・サノが、ドイツからやってきた日本人からのコソ宛の手紙を、リユクス「ホテル野坂夫妻の住居」にもつてきた。コソは、その日本人と会うことは是非について、キム・シヤンの意見を求めた。キム・シヤンは彼に、妥当とは思われないと答えた。それでも、コソは会った。

一九三四年一月一日
(手書きサイン)「エフ・コソリニコフ」
(藤井一行訳)

「ソコ」のロシア語表記の発音だけからなら、「千田是也（せんた・これや）」がすぐに思い浮かぶが、千田はすでに本名で登場し、この頃日本で獄中にある。候補としては「園崎」に鹿野を被稱した「仙庭康（せんば・こう）」、中国人で園崎グループとベルリンで活動した戦後の中国人民大學学長「成仿吾（せい・ほうご）」、当時ベルリンの大学生「千足（せんぞく）」高保」などが考えられるが、現時点では決め手はない。

同じ園崎会談記録のなかの、「ツェンゴ」と二権に反チ活動をしている「アタチ」については、小栗喬太郎園崎に安達鶴一、小林陽之助園崎に安達某とでてる。これは、三・一五事件後の『無産者新聞』編集を手伝った、東大新人会出身で三四年当時ベルリンの大学生の「安達鶴太郎」である。安達の名は、最近発表された伊藤園崎の遺稿に、戦後占領期の時事通信社編集局長として登場する。安達は、土屋喬雄とともに、伊藤園崎に対して、園崎定酒がスパイではありえないことを、断言したという（伊藤三重スベイ野坂巻三『文藝春秋』九四年一月号。朝鮮人「キム」については不明である。

三四年夏にロンドンからモスクワ入りして、ミナミと和井田の手紙をオカノ野坂巻三あてで持ち込んだ日本人「イノウエ夫妻」も、私の調査では、今のところ特定できない。三三年当時のベルリンの大学生で、三三年にロンドンに渡り、その後米した「井上角太郎」、安達鶴太郎とつながるジャーナリスト

目崎定洞は、東大助教時代に新人会に協力し、ベルリン反

「レフ」には、早謝野、佐野、安達ら東大新人会OBが全ま

当時の学生運動に協力した左翼ないしレフの大学教授・

芸術家も加わっている。大岩誠調書が示唆するように、日本で

の弾圧や言論統制を逃れてヨーロッパにやってきた学者、芸術

家や学生運動経験者たちのベルリン・パリ・ロンドンを拠点と

したネットワークが、おそらく関係すると思われる。いずれに

せよ、三四年夏の時点でなお、国崎の創設したベルリン日本

人反帝グループが、「ツェンク」のいうような活動を続けて

いたとすれば、それは、国崎定洞らの在欧反帝・反ファシヨ

活動の歴史(加藤「国崎定洞」に、新たな一頁を書き加えるこ

とになる。それは、在欧日本人の反ファシズム人民戦線だっ

ところか、こうしたヨーロッパ経由でモスクワ入りする「

連秘密警察や山本にとつて「不審な日本人・アジア人と国

崎とのつながりが、山本監獄夫妻からスパイ活動と疑われ、

「密告」されていた。国崎定洞は、三四年末のキプロ暗殺で

スタリンの廣が強まり、コミンテルン東洋部でもサフロフ、

アジヤールが逮捕されるなかで、三五年二月には、「闇の男」

「巻末資料5」のように身辺調査が行われ、ひそかにNKVD

Dの監視下におかれた。

東洋学研究所での国崎定洞の教員であった。このつながりで、

もに外国労働者出版所日本課の中心であり、同時にナリマン

山本により再度告発され除名された伊藤政之助は、国崎と

この三四年秋のNKVDによる国崎の身辺調査には、以上の

勝野金政出国事件に関連した「国崎アイル」からはじめてな

い、もうひとつの伏線がある。それは、共同印刷活版工出身の

日本共産党員伊藤政之助(一名春回復決定書)で最終的に国崎

有罪の二人の証言者の一人とされる「タケウチ」への、やは

り山本監獄の告発と思われるスパイ容疑・粛清である。

「闇の男」の著者小林峻一氏らの最近の調査では、伊藤は、

シートを繰り返して二年七月に帰国後日本共産党に入党、二年

一月に検査され、二九年一月に偽装転向の密約書を書いて

仮釈放、「党の許可」なく三〇年六月に入りし、ウラジスト

ックで働きはじめた。この時、現地の日本共産党代表山本は、

党の許可なく入りしたこと、伊藤を一度監獄処分にする。野

坂は、三年二月に、日本語印刷所をつくるため元活版工伊

藤をモスクワによびよせ、伊藤は三四年六月から外国労働者出

版所に勤務、国崎の同僚で部下、かつ東洋学研究所の教員と

なる。伊藤と国崎のつながりも怪しまれたらしく、コチニコ

フによる九月の山本会談と一〇月の国崎・野坂両会談のちよう

ど中間にあたる三四年一〇月二日、伊藤と国崎の二人の住所が

コミンテルン人事部に通知され、二月に「タケウチに関する

Dの監視下におかれた。

「巻末資料5」のように身辺調査が行われ、ひそかにNKVD

「闇の男」の著者小林峻一氏らの最近の調査では、伊藤は、

「伊藤アイル」のほうからみると、山本が密告・内通者、勝

「伊藤アイル」のほうからみると、山本が密告・内通者、勝

密告者、山本が犠牲者として現われるが、「国崎アイル」や

「闇の男」では野坂と山本の関係に焦点が当てられ、野坂が

た自己保身と思われる。

年八月の国崎定洞逮捕後に始まり、妻電の逮捕で決定物になっ

同じであったろう。このかぎりでは、野坂の山本告発は、三七

年八月の国崎定洞逮捕後に始まり、妻電の逮捕で決定物になっ

ているかにも見える。おそらく、土方与志ら非党員への態度も、

距離を保ちつつも、どちらかといえば、なお「同志」として扱

三・竜夫妻は、片山とつながる国崎定洞や伊藤政之助に対して

本人を「連秘密警察に告発してきた「内通者」であり、野坂参

のは、一九三六年までは、山本監獄こそ積極的に在モスクワ日

これら旧「連公文書館所蔵アイル」の検討から浮かび上がる

「内通者」山本監獄の密告による国崎定洞の粛清

この文脈にある(「闇の男」三六頁)。

本人部」の人員たちの情報を知ることができる」という一節は、

つている。コチニコは「ルフトでもクルトペ」「A」セクター「日

する報告文書中、タケウチはコチニコと直接的・恒常的關係をも

る。三五年二月九日のコミンテルンからNKVDへの国崎に関

疑念」が連絡された記録が、小林峻一氏らにより発見されてい

七回大会出席のためモスクワに戻っていた野坂に春開され、第

二回監獄処分をうける。三六年五月に野坂が再び渡米すると、

山本監獄は、三六年八月四日付けで、日本共産党の許可なく入

つした過去を再び蒸し返し、コミンテルン国際統制委員会に伊

藤の除名申請の手紙を帯いた。伊藤は、三六年一〇月二十九日付

けて国際統制委員会による除名が決定され、三七年中(月日不

明)に逮捕・統制された模様である(山本自筆の「伊藤政之助除名

申請書」を含む「伊藤政之助アイル」を中心とした以上の伊藤の真摯通

程の分析は、九三年一〇月三日の本書出版記念会の講演で、小林峻一氏

により公表された。

山本により再度告発され除名された伊藤政之助は、国崎と

もに外国労働者出版所日本課の中心であり、同時にナリマン

東洋学研究所での国崎定洞の教員であった。このつながりで、

「伊藤アイル」のほうからみると、山本が密告・内通者、勝

密告者、山本が犠牲者として現われるが、「国崎アイル」や

「闇の男」では野坂と山本の関係に焦点が当てられ、野坂が

た自己保身と思われる。

年八月の国崎定洞逮捕後に始まり、妻電の逮捕で決定物になっ

同じであったろう。このかぎりでは、野坂の山本告発は、三七

年八月の国崎定洞逮捕後に始まり、妻電の逮捕で決定物になっ

ているかにも見える。おそらく、土方与志ら非党員への態度も、

距離を保ちつつも、どちらかといえば、なお「同志」として扱

三・竜夫妻は、片山とつながる国崎定洞や伊藤政之助に対して

本人を「連秘密警察に告発してきた「内通者」であり、野坂参

のは、一九三六年までは、山本監獄こそ積極的に在モスクワ日

これら旧「連公文書館所蔵アイル」の検討から浮かび上がる

情況

五月 第四十七号
四月十一日 第四日 号
第二卷 第四十七号

本誌は、無数の苦悶で、歌き、語られて、いたのである。
「噂」を扱えなかつた山本懸蔵の悲劇

ろ。すでにいくつかの日本のメソイズが追いついて、そこらどんな「人間の劇」が浮かび上がるかは、今のところ、蔵の中で。今後他のフアイルから、神崎出身の四人以外に、も、國崎の強制「自白」による犠牲者がでてくる可能性も、無、否定できない。本書に用いられた文藝取材班班長堀文香のほ、かつて私と川上武は、國崎と区P.D.反主流派ハインツ・イン、アツやイリ・ミンツェンブルグとのつながりや、スペイン、義勇軍志願のような政治的要因を、國崎定清の理由として、推定していた（「流離の革命家」）。それらが間接的に疑惑を強めたにしても、在モスクワ日本人内部の疑心暗鬼の「人間の劇」のほうに、國崎定清の主たる直接的理由だった。國崎の光緒は、九一年夏に私がベルリン旧MI研究所で発掘した三七年八月二日付け在モスクワ区P.D.の除名指令番（加藤「運動家と社会主義花伝社一九二一年でも最後までドイツ共産党とされているが、モスクワではむしろ、日本共産党関係の仕事に主として従事し、その内那葛藤と疑心暗鬼にまきこまれて、逮捕、統制さ

「噂」を扱えなかつた山本懸蔵の悲劇

演出家佐野碩・土方与志の国外追放・出國は、國崎逮捕直後の三七年八月二日であった。やがて一月二日に山本が逮捕され、三八年に入ると、國崎のクート・東洋学研究所の教え子であった日本人主として神崎出身のアメリカ共産党員も次々と逮捕される（この四員のフアイルは、フジテレビと財界が所有しているという。私の調査では、三七年からの累計で、在ノ日本人籍者犠牲者は流刑・行方不明を含めて少なくとも二四人に及ぶ。「闇の男」によれば、当時アメリカにいた野坂参三は、國崎逮捕の報を知つてすぐに、自分と野坂竜に嫌疑が及ぶのを恐れ、逆に山本懸蔵夫妻を「元」初めての電報を打つた（本書二頁）。

たが、野坂の山本に関するフイミトロフへの「密告」、山本による勝野・根本・伊藤・國崎らについてのコミンテルン指導部やソ連秘密警察への「密告」は、個人的怨恨や悪意によるものだったのだろうか？ 私は、そうは思わない。たぶん悪意と使命感にあふれた、「日本共産党と社会主義の祖国」運邦を守るため「の、党性の産物だったろう。

おそらく野坂や國崎も、善意にあふれ、党性性は持っていた。野坂はそれを、自己保身と結びつけた。國崎は、フイミル共和制末期のドイツ共産党で活動し、労働者政党的分裂に乗じたナチスの勝利をつかさどるに見てきたから、非黨員であつてもたまたちにスペインとは考えず、その人物をフアシストか反フアシストから判断する度量を持っていたらう。

山本懸蔵は、「ソ連にたいする反逆者であるところか、日本国内での宮本顕治や村田里見の場合と同じように、「世のうえに個人をおかずにソ連社会主義と日本共産党に献身し、「スパイ・挑発との闘争」の先頭にたつて疑わしい同志を「党員の義務」として忠実に上級機関に報告していったからこそ、「密告者」「内通者」でありえた。そして、それが他の人びとの生命に関わる脅威であつたかぎり、野坂に「売られ」もしたのである。宮本顕治の三年指令によると、三八年正月の杉本良吉・岡田嘉子の特大本懸蔵に象徴されるように、まことに、地獄への

それでも竜は、山本逮捕の当日に世を除名され、杉本良吉・岡田嘉子が佐野・土方の国外追放も知らずに正月に國境を超えた直後の、三八年二月一日に逮捕される。その世を解放させるために、どうやら野坂参三は、けつきよく山本夫妻と國崎を見放し「売る」ことで、自分たち夫婦の生命を守つたようである。山本の妻關マツは、逆に野坂夫妻と「大物スパイ」コンソニ崎とのつながりを強調して野坂参三を告発し、獄中の夫を救おうとしたが（資料3）、野坂の「山本は左派だ」の一言で、フイミトロフとソ連秘密警察の「機密者」指名争いに敗れた（二三頁。数年前に私は、川上武や私の國崎についての調査に何も答へなかつた野坂の「歴史における沈黙の責任」に蝕れ、苦しい皮肉をこめて、野坂の「美しい夫婦」と書いた「コミンテルンの世界」であらう。同様の女性のたちの歴史「人間の劇」は、山本夫妻にもみられたようである。

各行人「ソビエト」不可知の階級と「ソビエト」小資本主義の共産主義は何てないか？ 吉田憲夫「ソビエトの未来社会像」小倉利丸商品「自明性の良」有江大介「統制された呪物性」曾木孝平「ソビエト・ナルク」といふ可能

性●母野薄秋「資本の文明史としての生産力形成の論理」

浅井基文「アメリカの戦略転換と小沢「国連中心主義」の破綻」伴野文夫「通貨統合と「国家の壁」

本誌「新刊」野坂大橋「大橋」即編「カ」ノ現代思想としての批判性「定価三〇〇円」松本「近刊」松本「野坂」の「本誌」松本「野坂」の「本誌」松本「野坂」の「本誌」

定価三〇〇円（本誌）二〇〇円（本誌）二〇〇円（本誌）二〇〇円（本誌）

定価三〇〇円（本誌）二〇〇円（本誌）二〇〇円（本誌）二〇〇円（本誌）

定価三〇〇円（本誌）二〇〇円（本誌）二〇〇円（本誌）二〇〇円（本誌）

特集
いま、

窓 20

1994 SUMMER

なせボランティアが

変わりはじめたボランティア
楽しんでこそ、ボランティア
ボランティアという概念のない世界を求めて

“縦型社会”から“横型社会”の時代へ

企業ボランティアは本物が

自立した市民としての国際ボランティア

学生ボランティアの悩み

ボランティアの歴史から考える

ボランティアからプロフェッショナルへ

企業と個人の窓を開く

コイダイキーターとしてのボランティア

思想としてのボランティア

北朝鮮問題

北朝鮮は、全日成の銅像が見えない国、か

李 英和

- * 小川 剛
- 山崎美貴子
- 高橋陽子
- 伊藤道雄
- 興相 寛
- 葛西裕美
- 根本悦子
- 内藤敦子
- 堀田 カ
- 鶴丸高史
- 岡村真理子
- 早瀬 昇

R:メド・レジエフ
N:メド・レジエフ

- 大沢真理
- 林 カ
- * 浅野 晋
- 周 海林
- 江本嘉伸

窓社
MADE IN JAPAN
定価1700円(本体1650円)

ISBN4-943983-78-2 C3030 P1700E

北朝鮮は「金日成の銅像しか見えない国」か
北朝鮮留學記・補遺

李 英和 2

麥わりはじめたボラニア
「正しき志向から」楽しき志向へ

早瀬 昇 18

楽しんでこそ、ボラニア
主婦から國運ボラニアへ

岡村真理子 26

第二期の家
経営者が障害者でなくなるといふこと

鶴丸高史 43

縦型社会から「横型社会」の時代へ
「ふれあいの論理」とはなにか

堀田 力 52

企業ボラニアは本物が
模倣をはじめた日本企業

内藤敦子 65

自立した市民としての国際ボラニア
身近なところに課題がある

根本悦子 80

学生ボラニアの悩み
「自分のため」と「社会のため」の間で

葛西裕美 92

ボラニアの歴史から考える
外圧と自立の戦略的構想

興相 寛 104

ボラニアからプロフェッショナルへ
政府や企業にできない国際協力

伊藤道雄 117

企業と個人の窓を開く
会社人間からの脱却を求めるフライングロビー

高橋陽子 125

コーネーターとしてのボラニア
生活と社会の構造変化のなかで

山崎美貴子 132

思想としてのボラニア
人はなぜボラニアをするのか

小川 剛 153

パート労働の日本比較をしよう
大企業から中小企業へ

大沢真理 11

差別を大学はいかに教えるか
同和教育運動に学ぶ

林 力 178

なぜ公益法人に「許可」が要るのか

浅野 晋 86

特集11 いま、なぜボラニアか

